

“小学校英語教育勉強会”

—英語を使える子どもたちを育てる—

公立小学校に教科としての英語教育が導入されて一年が過ぎました。
英語の指導にあたっていらっしゃる担任の先生、専任の先生、地域ボランティアの先生、派遣ALTの方々はそれぞれに力を尽くし指導に当たっていらっしゃると思います。

芦屋市国際交流協会は、その前身、芦屋姉妹都市協会が1964年より姉妹都市モンテベロ市との学生親善使節交換事業を開始し、その後、市民のための英語教室を開設、共に継続中です。近年の小学校関連では、毎年のも市学生親善使節の小学校訪問、も市教師シルビア先生による2週間の市内小学校英語授業、絵やビデオの数回の交換などがありますが、国際文化住宅都市芦屋の国際交流協会として、より一層の国際化のお手伝いを致したく、『英語に強い芦屋っ子』を育てる環境づくりについて、思案を続けておりました。

数年前より芦屋在住の児童英語研究家、中本幹子氏が昨年より協会の教室活動に加わりました。更に、この度、小学校の英語教育に携わる先生方のための、英語教育法やその理念を共に学び、アイデアを持ち寄り、悩みをシェアし、共にパワーアップ、レベルアップできる場としての勉強会を企画しました。気軽に、多数の方にご参加頂きたく、ご案内申し上げます。

対 象： 芦屋市の小学校英語に携わっている方（専任・ALT・地域ボランティアの先生）
芦屋市及び近隣の市で小学校教育に携わっている方（担任の先生）
地域で児童に英語（英会話）を教えている方
児童英語教育に興味のある中学校の英語の先生

プログラム構成：全10回コース

★講義とワークショップ 1時間30分

なぜ従来の日本の英語教育は成功していないか理由を探り、単に楽しい歌やゲームを紹介するのではなく、「言語活動とは何か」を理論的に考えるとともに、数多くの言語活動を紹介し実際に行っていただきます。

★実践のクラスや教科書についてのアイデア・問題点・なやみシェアタイム 30分

「英語を使うということは何を意味しているのか」「中学校で良い成績をとるのが小学校英語教育の目的？」「ゲームと活動の違いは？」「英語を使って遊ばせているだけでよいの？」等々の悩みをみんなで話し合います。英語の苦手な先生のためのチャンツによる英語リズムの練習もあります。理論や経験からアドバイスをいたします。

※使用言語：日本語／ネイティブスピーカーの先生が参加の場合、日本語・英語

日時：令和4年6月19日～令和5年5月21日（7,8月は休講）

毎月第3日曜日 午前10時～12時

場所：芦屋市立潮芦屋交流センター

（〒659-0035 芦屋市海洋町7番1号）

主催・申込先：認定NPO法人芦屋市国際交流協会
事務局 電話：0797-34-6340

お申込み・お問い合わせ



後援：芦屋市教育委員会



企画構成・ファシリテーター：中本幹子より

過去50年間 幼児・児童・中・高・大・成人に英語を教え、教材を作り、現役の先生を対象とした児童英語教師育成講座、文科省の教員免許更新講習、大学での児童英語教育法の指導に従事してきました。芦屋市国際交流協会より、芦屋市の小学校の英語教育をより良いものにするためのサポート事業についての提案を受け、これまでの経験から、何かお手伝いが出来ないかと本勉強会を企画いたしました。

日本人の英語運用能力はアジアでも最下位にちかく、しかもそれが何十年と変わっていない現状から従来の英語の教え方に疑問を持ち、より良い英語の教授法を悩み模索してまいりました。今回子どもの頃から英語を教える意義と利点と問題点、その解決法を現場の先生にお伝えし、話し合い、子ども達が楽しく効率的に英語を習得できる教授法を皆さんと一緒に考えていきたいと思っております。多くの児童英語教育に従事していらっしゃる先生方に参加していただくと嬉しいです。

*ファシリテーター：一方的に講義をする指導者とは異なり、受講生が持つ意見や知識、情報などを出し合い、課題を共有する“学びの場”を促進する役割を担う

参加費： コース参加費(全10回)5,000円 | 講座600円
事務経費としていただきます。中本氏は無償ボランティアです。

*全講義を通して受講が望ましいですが、止む負えない場合は一部の受講も可能です。

*第1回、4回、5回の講義についてはできる限り受講願いたい。

*修了者には芦屋市国際交流協会から修了証をお渡しいたします。

講義とワークショップのスケジュール

第1回 児童英語教育を始める前に 6月19日

「何のための英語教育?」「なぜ日本人は英語が下手なの?」「小学校から始まると英語が話せるようになるの?」これらの疑問をしっかりと把握し、解決法を定めないと、楽しいだけのお遊びの時間になるか、早くから英語嫌いを作るだけです。第一回目は英語教育の目標を議論し、日本の英語教育がなぜ効果的ではなかったのか、日本のこれまでの英語教育の問題点を探ります。

第2回 さまざまな教え方 9月18日

一口に英語と言っても、「英語が話されている国で生活するのに必要な第2言語としての英語」「学校で科目として学ぶ外国語としての英語」「世界共通言語としての国際語としての英語」それぞれ教え方が違うはずですが。日本人として国際英語を使って世界で活躍する人材を育てるにはどんな教授法を使えばよいのでしょうか。従来の文法中心、単語の習得中心・訳中心、ダイアログ中心、パターンプラクティス中心の教授法から、他とコミュニケーションを取るため自分の言葉で話すことを中心とした教授法、他の科目を英語で学ぶ教授法などを、講義ではなく、それぞれワークショップ形式で実際に体験しながら考えていきます。本勉強会ではコミュニケーション・タスクベースドをキーワードとしています。

第3回 言語教育の教師の在り方 10月16日

文法やスペルを覚えたり、暗記したダイアログを言うのではなく、自分の言葉を使って発話させるための指導者の在り方を探ります。先取りではなく発達段階に応じた教え方、発話に自信を持たせるには指導者の態度が大切です。

第4回 コミュニケーションって何? 11月20日

先生が犬の絵を見せて、What's this? 生徒:It's a dog. 先生:That's right. よく授業で見かける風景ですが、これって何か変じゃないですか。That's right. と分かっているなら最初から尋ねる必要がありませんね。これは言語のやり取り(コミュニケーション)ではなく、言語練習です。コミュニケーションとは、そこに主体的な情報・感情・意見の授受があることです。その上、我々が英語を使うときは文化も価値観も異なる外国の人と話す時です。お互いに理解しあえる情報、感情、意見の交換しあえる能力とは、またその能力を伸ばすための教授法を考えます。

第5回 指導の実際 発話を促す活動 12月18日

教室内で子どもたちの自主的な発話を促す活動を学びます。同じ言語材料でも発話を促す活動は低学年時と高学年時ではずいぶん違います。英語の難易度だけではなく、子どもの年齢による知的好奇心の違いを考慮して活動を構成する必要があります。それぞれの年齢の知的好奇心を刺激し、子どもたちが自ら手を挙げて、自らの言葉で発表したくなるクラス運営を、様々な活動に実際に参加して習得します。

第6回・第7回 定着を促す活動 1月15日

子どもたちが英語に接する時間は限られています。授業で“使った”英語は定着を図るため暗記させなければなりません。重要なのは言葉として英語を使った後に定着を図ることです。

英語を効率よく定着させるには、繰り返し、楽しく英語を言わせることです。英語の持つ音、イントネーション、リズムを聴いたとおりに再生させる能力は成長にしたがって弱くなります。

6回、7回目は楽しく効果的に定着できるクラスで行うゲームや動作の付いている歌、チャンツを通して英語を教える利点と実際を学びます。ただし、日本の英語教育はこの定着に重点を置きすぎたので英語が使えないという結果が起きています。6、7回目を受講する先生は3、4、5回を受講してコミュニケーションとしての言語を理解した後に受講してください。

第8回-① 絵本を使って教える 2月19日

絵本を使って教えるメリットは子どもたちの意識を教室の外に連れ出せることです。

挿絵が理解を助け、登場人物(動物)たちのセリフが繰り返し出てくるものが多くあります。

第8回-② フォニックスと音読

フォニックスとは英語のスペルと音の関係を学ぶものです。フォニックスを学ぶことにより英語を音読できるようになります。フォニックスのルールと指導法を学びます。

第9回-① 児童英語教育における読む指導 4月16日

「読む」行為とは書かれたひとかたまりの文から情報を得る行為で、日本語に訳すことでもまして部分訳を書くことでもありません。情報を得る活動を年齢別に考えます。

第9回-② 児童英語教育における書く指導

「書く」(writing)とは、単語のスペルを覚えたり、日本語を英語に訳したりすることだけではありません。

記録にしても感想文にしても客観的なレポートにしても書き手の能動的な行為です。

書く行為からそれを効果的に伝えるプレゼンテーションまでの教材、教授法を考えます。

第9回-③ 児童英語教育における文法指導

文の規則を、文法用語を使わずにその機能から教える方法を学びます。

第10回-① レッソンの構成 5月21日

英語を使えるようになるには何をどの順序で教えたらいいのかを考えます。

習った英語を使う機会を作る方法、会話を拡張させていく方法を学びます。

第10回-② 評価について 総合質疑応答

学校の評価とは別に到達度評価を作ってみませんか。子どもたちに達成感を持たせることが次の学習の動機づけにつながります。